



①



④



③



②



⑤



⑥

写真で見る社会科

山古志 ふたたび

新潟県長岡市山古志地域は、新潟県のほぼ中央に位置する。標高約200mから400mほどの山間部に複数の集落が点在している。越後平野と越後山脈の接点であり、冬には日本海から直接吹きつける北西の季節風の影響で、3m以上の積雪となることは珍しくない。

平面的な耕作地がまとまって存在しないこの地で、人々は斜面に田畑を耕し、斜面から山中へ横井戸を掘って水を確保し、宅地と耕作地を階段状に形成した。この営みによって、日本の原風景と呼ばれる棚田の風景を生み出した。棚田は水稲用だけでなく、食用鯉の養殖池として活用された（写真①）。江戸時代に鯉が変異を起こしたとされ、以降「錦鯉の産地」として脚光を浴びた（写真②）。池上げの季節には、国内だけでなく欧州など世界各地からもバイヤーが買い付けに来ている。また、『南総里見八犬伝』に記されている「牛の角突き」は、国の重要無形文化財に指定されている（写真③）。

2004年10月23日に発生した中越地震によって、山古志村（地震半年後に長岡市と合併）一帯は大きな被害を受けた（写真④）。土砂ダムによる集落の水没、棚田の被害、基幹道路の損壊などのため、全村避難が行われたのは記憶に新しい。国・県をはじめ、多くの人々の支援を受け、

- ①山古志の棚田。手前は鯉飼育用の池
- ②錦鯉
- ③山古志闘牛場の「牛の角突き」
- ④中越地震直後。村内および村外への基幹道路が損壊
- ⑤冬の行事「古志の祭り」。巨大な「さいのかみ」が登場。2008年冬復活
- ⑥山古志中学校生徒による「中国・四川大地震」街頭募金活動

少しずつ復旧が進められた。2006年に帰村が始まり、同年秋には小・中学校が再開。2007年には、おもな道路工事が終了し、年末には仮設住宅からの完全退去が行われた。闘牛や古志の祭りなどのイベントも再開され、日常生活が戻りつつある（写真⑤）。

ただ、課題も残っている。震災直前と比較すると、地域人口は約3割減少した。この震災によって日本の中山間地が抱える「共同体の維持」「過疎化対策」「少子高齢化の対策」「地域づくり」等の問題が一気に押し寄せた。しかし昔からこの地の人々は、厳しい自然がもたらす困難を粘り強く乗り越えてきた。地震を苦としない強い気持ちや、山古志の人々は持っている。「震災を通して全国・世界とのつながりができた」と語る人々の表情は、山古志が今まで以上に復興し、自分たちの元気をなせることで、多くの人たちへ恩返しをしたい、という希望で満ちあふれている（写真⑥）。

（新潟大学教育学部附属長岡中学校 関 拓也）

写真協力 ③⑤：長岡市役所山古志支所
④⑥：長岡市立山古志中学校

写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。国内・海外で撮影された社会科の写真を、資料編集部「中学校社会科のしおり」係までお送りください。